

ICF-CY（児童青年期版）の策定動向と特別支援教育における活用

○徳永亜希雄

（国立特殊教育総合研究所）

KEY WORDS: ICF-CY, ICF, 特別支援教育

はじめに

障害者基本計画（2002）において、ICF（国際生活機能分類）の活用施策を検討する必要性が指摘され、我が国の障害のある子どもたちへの教育の分野でも、様々な形でICFの活用が試みられている。それらの中で明らかになってきた課題の中の 하나가、児童期や発達初期段階にある人にとって、ICFが使いづらい面がある、ということである。そのことは既に国際的にも指摘されており、ICFの補助分類としてICF-CY（児童青年期版）の策定が検討され、2006年5月頃にWHO（世界保健機関）総会で採択される見込みとなっている。そこで、本論では、ICF-CYの策定動向を概括し、我が国が推進する特別支援教育における活用について、その可能性と課題について考察したい。

ICF-CYの策定動向

2001年、WHOは次のような認識に基づき、ICF-CY策定作業を開始した。第1に、誕生から20歳になるまでの間（以下、児童青年期と略記）は、身体的にも心理的にも、また社会とのかかわりにおいても、急激に成長・変化する存在である、ということ。第2に、障害の発現や慢性的な状態は、児童青年期にとって、成人以上に大きな影響を及ぼすものであるということ。成人とは異なる、このような特徴を持つ児童青年期のために、従来のICFとは異なるバージョンが必要であるという判断から、ICF本体の補助分類としてICF-CYの策定が着手された。

WHOは、ICF-CYワークグループ（以下、WGと略記）を作り、2002年から策定作業を進めた。2003年秋に最初の試案（1st Draft）がWGからWHOに提出され、その後、フィールドトライアル（以下、F Tと略記）を目的として、2004年夏にWHOのウェブサイトに掲載された。F Tの結果等を踏まえ、2005年6月にさらに改定が加えられた試案（2nd Draft）が再びWHOに提出された。2005年12月にWHOのICF担当者への聞き取り調査を行った時点では、世界各地で最終レビューを実施している段階であり、その結果を踏まえてWGが最終検討を行い、WHO総会での採択を経て、正式にICF-CYが決定・出版される手順になっているとのことだった。

ICF-CYの概要

0～20歳の人を対象とした、ICFの補助分類としてのICF-CYの検討作業は、既存のICFをベースにしながら行われ、2回目の試案の段階では、ICF本体に対して、237項目の変更（3桁レベルでの99項目の追加と28項目の削除、4桁、5桁、6桁レベルでの110項目の追加）が行われている。また、次のような視点で策定作業は行われた。

- ①児童青年期固有の内容を追加する（例：口を使った遊び）。
- ②児童青年期にとって適切でない内容は除く（例：閉経）。
- ③児童青年期にふさわしいものの例示を採用する。
- ④定義や基準を工夫し、保護者や保健専門職、教師、その他の児童青年期にかかわる専門職に使いやすいようにする。

ICF-CYと日本のかかわり

2004～2005年にかけて、ICF-CY策定に向けたF Tが世界各地で2回に分けて行われた。日本では、2005年5～6月にF Tが行われ、同年6月、その結果をICF-CY-WG

に提出した。その内容は、前述の2nd Draft用のレポートの中に9頁にわたって反映されている。一方、2005年6月のICF北米会議、同10月のWHOの国際分類世界会議、WHOと国立特殊教育総合研究所のやりとり等を通して、日本での児童青年期におけるICFの活用状況は世界の関係者にも認知されており、ICF-CYの活用推進についても、WHOから日本への期待の声が寄せられている。また、ICF-CYの策定作業に関わった経緯、日本でのICF活用の実績等を踏まえて作成したICF-CYの活用に関する提言レポートが、筆者からICF-CY-WGに提出されており、策定作業のための今後の資料とされる予定となっている。

特別支援教育におけるICF-CY活用の可能性と課題

以上のようなICF-CYの概要及びICFの特徴等を踏まえ、特別支援教育におけるICF-CY活用の可能性として、次の4点を指摘したい。

第1に、共通言語としての性格を利用した、個別の教育支援計画等を通じた多職種間連携等への活用が考えられる。実際に、既に多くの養護学校での活用が検討され、報告されている一方で、用語の難しさ等が課題として指摘されている。第2に、障害のない人も含めて全ての人を対象とし、診断名等ではなく生活の中での困難さに焦点を当てるという性格に基づいた、多様なニーズの理解や対応への活用が考えられる。具体的には、多様な障害種への対応が求められる特別支援学校での活用、障害の枠を超えた通常学級でのニーズへの対応等への活用が期待される。そのためにもICF及ICF-CYのさらなる普及の必要性が課題として指摘される。第3に、評価ツールとしての側面を利用した、指導や支援のアウトカム評価への活用が考えられる。未だ、教育分野における報告は少ないが、行財政の構造改革が進む中での教育効果を示す指標としての活用が期待される。第4に、環境等の背景因子を取り入れた幅広い視野から個人の生活を見る等のICFの理念等に基づいた教育課程の改善・充実等への活用が考えられる。これまでにICFとの学習指導要領との適合性についての報告が既にあるが、現在、学習指導要領改訂に向けた検討が進められていることを踏まえ、具体的且つ実際の提言が急務と考えられる。

今後の展望

ICF-CYは、本質的には児童青年期を対象とした作成された生活機能と障害の分類であり、学校教育のために開発されたものではない。そのことを踏まえ、教育学的な検討を加えながら、その活用方法を検討することが重要である。また、今後の実際の活用のために、平易な言葉での翻訳やガイドライン作成、研修パッケージの開発等が必要である。

文献

●Simeonson R J, Lwonnardi M, Bjork-Akeson E, Hollenweger J, Lollar D, Marinuzzi A, Napel H T, The ICF-CY: a derived classification for children and youth, WHO-Family of International Classifications Network Meeting, 2005.

●徳永亜希雄, ICF及びICF-CYを巡る動向世界の特殊教育 20, 29-35, 2006, 国立特殊教育総合研究所 等 (TOKUNAGA Akio)

ICF-CY（児童青年期版）の策定動向と特別支援教育における活用Ⅱ

○徳永亜希雄

（国立特別支援教育総合研究所）

KEY WORDS: ICF-CY, ICF, 特別支援教育

はじめに

昨年の44回大会においては、同タイトルのもと、発表時点までのICF-CY（国際生活機能分類児童青年期版、仮訳、以下同じ）の策定動向、概要、特別支援教育における活用の可能性と課題について述べた。今回は、その続編として、ICF-CYを巡るその後の動向、日本の特別支援教育におけるICF及びICF-CYにかかわる動向を整理し、今後の展望について若干の考察を加えたい。

1. ICF-CYを巡る動向

（1）国際動向

2006年10月31日、チュニジアで行われたWHO-FIC Network Meeting(Family of International Classification, (世界保健機関の国際分類ファミリー、疾病分類のICD-10等を含む)に関するネットワーク会議)において、ICF-CYが承認された。筆者は、日本の政府代表枠ではなく、WHOのICF-CYワーキンググループの関係者の枠で出席し、議論に参加した。また、2006年の同会議では、ICFに特化して検討する下位グループFDRG(The Functioning and Disability Reference Group of WHO-FIC)が設置され、今後、ICF-CYの取り扱いについては、その中で検討されることになっている。現在、WHOにおいて正式な採択に向けた検討が行われており、2007年10月には、ICF-CYに特化した会議として、WHO-FICミーティングの直前にConference on Children Health, Disability and ICF-CYがイタリアで開催される予定である。

一方、2007年6月にアメリカで行われる13th Annual North American Collaborating Center Conference on ICF(ICFに関する第13回北米地区会議)において、全体会の中にICF-CYについて検討するプログラムが企画され、筆者らから日本の動向について報告する予定である。

（2）国内動向

前述の通り、ICF-CYはWHOで正式に採択されていないため、日本国内においては、WHOのHP以外で全体像を知ることが難しい状況にあるが、様々な関連した動きが見られる。ICFを所管する厚生労働省においては、2006年に社会保障審議会統計分科会生活機能分類専門委員会を設け、ICFに関する諸課題について検討を進めており、議題の一つにICF-CYを取り上げている。そこでは、ICF-CYの概要や作業スケジュール等を概括し、WHOからICF-CYに関する勧告が出された後には、同専門委員会を中心に検討を行い、最終的に厚生労働省から日本語版を刊行したい旨が報告されている。

一方、教育の分野では、2006年に設置された中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会特別支援教育専門部会において、次期学習指導要領とICFとの関係について議論が行われている。2006年5月には、国立特殊教育総合研究所（現・特別支援教育総合研究所、以下、同研究所）によりICFについて資料提供が行われ、その中ではICF-CYの動向についても報告されている。また、同研究所においては、「ICF-CYの教育施策への活用に関する開発的研究（平成18～19年度、研究代表者＝筆者）」が研究課題の一つとして取り上げられ、国内外の関係機関との連携

のもとで、ICF-CYに関する研究が行われ、文部科学省初等中等教育局特別支援教育課主催のICF及びICF-CYに関する勉強会に知見を提供する等、少しずつ研究成果の公表を行っている。さらに、民間レベルの動きとして、ICF-CYと家族、子どものことを検討するネットワーク組織・ICF-CY Japan Networkでは、理解啓発・研修・実践研究等、複数の内容について、それぞれ検討が進められている。

なお、2002年に「障害者基本計画」において、障害の理解や施策推進の観点からICFの活用策を検討する旨が述べられている。今年はその区切りの5年目の年に当たることから、ICF-CYも含め、何からの総括がなされることになるであろう。

2. 特別支援教育における活用の動向

2005年4月、同研究所・WHOの編著として発行された「ICF活用の試み－障害のある子どもの支援を中心に－」は初版5000部が完売したために再版された。また、同研究所へのICF及びICF-CYに関する研修会・講演の講師依頼（打診を含む）や問い合わせ、研修受講者による研修課題としての検討等が増加傾向にある等、特別支援教育におけるICF及びICF-CYに関する活用やニーズは広がってきていると推察される。これまで、子どもの多面的な理解、多職種・家族等の間での共通理解等への活用による効果が報告されてきた一方で、①概念図を中心とした活用が多く、ICFの項目を活用するケースが少ない、②個人因子と現在、WHOの研究グループによる検討されている「主観的側面」の混同など、項目に対する曖昧な理解のもとでの活用が多い、等の課題もある。

3. 今後の展望

以上を踏まえ、同研究所の前述の研究においては、ICF-CYの本格導入の前に、特別支援教育におけるICFの活用状況を総括しておく必要があるとの認識のもと、ICF-CYの概要を含めた冊子を発行する予定となっている。前述のFDRG、国際専門委員会等におけるICFの活用方法等の連携しながら、ICF-CYの本格導入の前に、その活用方策等について検討を進める必要があると考えられる。

一方、そもそもICF及びICF-CYは、障害のある人だけでなく、全ての人を対象としたものであることから、特別支援学校のみならず、全ての学校において活用されるべきである。教育課程の指針となる学習指導要領でのICF活用が検討されているが、現在のところは特別支援学校用のものに限定されている。そのことを踏まえ、今後の対応策について、検討を進める必要がある。

<主な引用資料>

- Akio Tokunaga, Trends and Perspective of the Use of International Classification of Functioning, Disability and Health (ICF) on Special Needs Education in Japan, Journal of Special Education in the Asia Pacific Vol.2, 2006 ●第11回社会保障審議会統計分科会（2007年3月）資料 <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/03/s0327-5.html>
- 国立特別支援教育総合研究所、ICF及びICF-CYの活用－特別支援教育を中心に－、ジアース教育新社、（2007年6月発行予定）

ポスター発表 P3-20

特別支援学校のセンター的機能における ICF 活用

－ 子どもをどのように理解し、どのように支援につなげるか －

齊 藤 博 之

（山形県立上山高等養護学校）

KEY WORDS: 地域支援, ICF（国際生活機能分類）, IS09001

1 目的

近年、特別支援教育を推進する体制を整える上で、特別支援学校のセンター的機能の充実がますます求められている¹⁾。法制度的にも、平成18年に改正された学校教育法の中で、特別支援学校は、幼稚園、小学校、中学校、高等学校等の要請に応じて、必要な助言又は援助をする旨が規定されている。センター的機能の一つである地域支援は、幼稚園や小・中学校、高等学校等に在籍する特別な教育的ニーズを必要とする幼児児童生徒に適切な教育が提供されるよう積極的に地域とかかわりを持っていくことがその役割であると考えられる。

本稿では、筆者が校務分掌組織である地域支援室で行った実践を基に、地域支援における ICF 活用の具体的な方法と、相談・支援の仕組みを整えることについて報告する。

2 方法

（1） ICF の活用

小・中学校、高等学校等に在籍する、特別な教育的ニーズのある児童生徒等の状態像や、問題となる事象は多種多様である。そのような児童生徒等に対して、「この子をどのように理解したらよいか」、「何を指導したらよいか」と戸惑う声を聞く。「何かが問題である」と感じてはいるが、その状況が断片的な理解になりがちなために、支援に関して戸惑いを抱えているものと思われる。

そこで、問題状況を整理する際に、ICF の各項目を参考にしながら、構成要素間の相互作用図（枠組み）²⁾を活用した ICF 関連図を作成したところ、児童生徒等を多面的・総合的に把握することができるようになった^{3, 4)}。その流れは以下の通りである。

① 問題状況の表現

電話等で相談を受ける際に、相談の主訴や児童生徒等の生活・学習上の困難さ、年齢や検査等の結果、診断状況などの情報を個別記録シート等で確認する。

② 問題状況の整理

地域支援室のスタッフによる事前カンファレンスを行い、ICF 関連図（「子ども理解シート」）を作成する。ICF の項目を参考にしながら、枠組みを示す図に問題となる状況を貼り付けていく。ICF にはないが、子どもの「つぶやき」（主体・主観）についても把握しておくようにする。

③ 目標の設定と課題解決の方略検討

出来上がった子ども理解シートから ICF 関連図（「目標と支援計画シート」）を作成する。目標の設定にあたっては、「参加」の視点から考えるようにする。

④ 相談・支援の実際

依頼先に出向き、授業参観やケース検討会を行い、対象となる子どもの現状理解と課題・目標の設定、支援内容を確認する。

⑤ 評価・検討

地域支援室のスタッフによる事後カンファレンスを行う。依頼先で何が確認されたかをふりかえることと、相談までのプロセスについて検討する。

（2） 地域支援の仕組みを整える

特別な教育的ニーズのある児童生徒等の理解と支援内容

の設定にあたって ICF の活用は有効であることが認められた。しかし、それは実感レベルでしかない。相談依頼者のニーズに込えているか、また、一定水準以上の支援を保っているかどうかを測る方法として、地域支援の仕組みを整え、明確に示す必要があると考える。ここで参考にするのが、品質マネジメントの国際規格である IS09001 である⁵⁾。プロセスを基礎とした品質マネジメント・システムのモデルは、インプットとしての要求事項を決定する上で、顧客が重要な役割を持つことを示している。つまり、地域支援で言えば、依頼者のニーズに込えられているかどうかは依頼者の満足によって決定されることを示しており、「気になる子ども」の問題と言われる内容が改善されているかどうか重要であることを示す。このことをきちんと証明できるようにすることで、地域支援の評価が可能になるものと考えられる。

3 結果と考察

ICF の活用により、よりの確な子ども理解と、より適切な支援内容の設定ができるようになった。子どもの問題状況を ICF 関連図で表すことで、一つ一つの状況が関連付いていることが理解された。このように、問題状況を関連的に表すことで、ある事象が改善されると、それに関連する事象も改善されるであろうと仮説を立てることができる。つまり、指導の経過に伴って得られる指導上の効果が予測でき、実際の指導にあたって、仮説のような予想通りの成果が得られているかどうかを確かめたり、予想と異なるところを修正したりすることが可能になるものと考えられる。

また、ICF が様々な利用者間の共通言語であるという特徴から、教育だけではなく、多くの職種の関係者と情報を共有しながら支援に取り組むことができるようになった。

「よりよい「参加」の姿」をイメージすることと、否定的な感じから肯定的な感じへ「つぶやき」を転換させることを意識して目標設定することで、より具体的な支援内容を考えることができるようになった。

ほかにも、様々な「問題」を子どもだけに還元するのではなく、環境との相互作用の中で捉えようとする ICF の特徴や、IS09001 における、「是正処置」、「予防処置」の観点も、特別な教育的ニーズのある子どもを支援する際に有効であると考えられる。

参考・引用文献

- 1) 中央教育審議会(2005): 特別支援教育を推進するための制度の在り方について(答申), 文部科学省。
- 2) 障害者福祉研究会編(2002): ICF 国際生活機能分類－国際障害分類改訂版－, 中央法規出版
- 3) 齊藤博之(2005): ICF の地域支援への活用, 『ICF (国際生活機能分類) 活用の試み』(分担執筆), ジアース教育新社
- 4) 齊藤博之(2005): ICF (国際生活機能分類) の地域支援への活用, 日本特殊教育学会第43回大会論文集
- 5) ISO/TC176 国内対策委員会監修(2001): 対訳 IS09001 (品質マネジメントの国際規格), 日本規格協会 (Hiroyuki SAITO)

「連絡帳」記述文の ICF による分類

－ICF を活用した連携の可能性を探る－

○ 下尾 直子

（日本女子大学大学院）

KEY WORDS : ICF 連絡帳 保護者との連携

【目的】特別支援教育における、保護者と学校の連携の重要性については、もはや議論の余地もない。しかし、その方法については、特に有効な手段のないまま、主に担任の資質や努力に任されているのが現状である。

坂本・西・緒方(2002)の調査では、特殊学級担任・保護者のどちらも、「個別面談・家庭訪問・保護者会・学級通信・連絡帳・電話・送迎時の会話」の選択肢の中で連絡帳の有効性を最も高く認めており、現段階で連絡帳を超える連携の手段が見出されていないことが示されている。

しかし、通常、連絡帳は手紙文の形式で記述されることが多く、その使用は日常のやり取りに終始し、記述された膨大な情報は整理されないまま担任と保護者の記憶の中にのみとどまることが多い。

そこで、本研究は、連絡帳に書かれた情報をより有効に活用するための方法を探るため、障がいに関する国際的な分類指標である「ICF(国際生活機能分類)」(障害者福祉研究会, 2002) による情報の分類整理を試みた。ICF は、生命・生活・人生の全ステージを包括的に網羅した分類であると言われ、学校と家庭という異なる場面での子どもの状態を同じ指標で把握することができると考えた。ICF を使った分類によって、連絡帳に書かれた情報が整理できれば、現在最も活用されている連絡帳という連携手段がより活かされ、ICF という共通言語を使って医療・福祉などの他分野にも連携の輪が有機的に広がることが期待できるだろう。

【方法】 個別支援学級・特別支援学校で使用された連絡帳を保護者を通して入手した。一冊の連絡帳について、最初の5日分と最後の5日分を取り出した。保護者と教師の記録それぞれについて、文章を意味ごとにカテゴリー化したのち、ICF の項目で分類し、可能な限り評価点を付記した。なお、記述文を ICF のコードと評価点で表記する方法は、先進国の ICF 活用法の主流となっており、わが国においても ICF の活用法として認知されつつある。

【結果】 対象となった連絡帳は、異なる 18 組の保護者と教師によってやり取りされた 18 冊、計 180 日分(のべ 360 日分)の記述を、以下のように、分類した。

事例 小5(男子)保護者→担任

土曜日は珍しくずっとうちにいました。久しぶりに録画しておいたテレビ番組「みんなの鉄道」を見たり、お父さんと体操をしたりしました。はじめてした腹筋は、両手をちゃんと頭の後ろにしてがんばってなんとか 10 回続けたが、

前にもしたことのある腕立て伏せは、いまだにイメージがつかみにくいようでした。



(参加) p 920 レクリエーションとレジャー

趣味(趣味番組の視聴) p9204.1

スポーツ(体操) p9201.3

(活動) a1550 基本的な技能の習得

腹筋: a1550.0 腕立て: a1550.4

(心身機能) 自己身体像 b1801.3

(環境) 家族の支援・態度 c310.+4 c410.+4

【考察】 ICF によって、連絡帳記述の分類を試みた結果、どの連絡帳も共通して、「参加」に分類される記述が多く、「参加」を説明する記述として「環境」や「心身機能」「活動」が語られていることがわかった。

さらに、上田(2005)がその概念の導入を提言している「主観」や、ICF では現段階で項目の分類がされていない「個人因子」に分類される記述が無視できない数にのぼることが指摘できる。また、「主観」については、本人の主観に関する記述より、環境因子である保護者や教師自身の主観が多く語られていることに注目したい。これによって、記述者の主観によって語られることと、客観的な本人の生活機能とを意識的に差別化することの必要性を示唆できる。

ICF による分類は、子どもの生活の様子を「参加」「活動」「心身機能」「環境」に分けることで、支援の必要な面を明確にできると評価できる。しかし、1400 以上ある膨大な項目数の中から該当の項目を引き出す作業は容易ではなく、評価点の判定に関しては、迷うところも多かった。

【引用・参考文献】

坂本裕・西正道・緒方明(2002)「小学校知的障害特殊学級における保護者と学級担任の連携について」、『岐阜大学教育学部治療教育研究紀要』24, 27－31.

障害者福祉研究会(2002)『ICF 国際生活機能分類』, 中央法規.

国立特殊教育総合研究所(2005)『ICF 活用の試み』, ジェーエス教育新社.

厚生労働省大臣官房統計情報部(2007)『生活機能分類の活用に向けて(案)』

上田敏(2005)『ICF の理解と活用』, 萌文社

http://www.icfconference.com/prog_pres.html

(Naoko SHIMOO)

【目的】 連絡帳の記述文を分析し、連絡帳の情報を簡便に整理するための方法を探る。

連絡帳は、保護者と教師双方にその重要性が認められている連携の手段のひとつである。が、通常は、手紙文の形式で記述されることが多く、その使用は日常のやり取りに終始し、記述された膨大な情報は整理されないまま担任と保護者の記憶の中にのみとどまることが多い。

そこで、まず、連絡帳には何が書かれているかを ICF（国際生活機能分類）に基づいて分析する。連絡帳には、主に何がどのように書かれているか、これを分析することによって、今後連絡帳の記述を整理し情報として活用することのできる方法を探る一助になると考えた。

【方法】

個別支援学級・特別支援学校で使用された連絡帳を保護者を通して 18 冊入手した。一冊の連絡帳について、最初の 5 日分と最後の 5 日分を取り出した。保護者と教師の記録それぞれについて、文章を意味ごとにカテゴリー化したのち、ICF の項目で分類し、可能な限り第一評価点を付記した。なお、評価点に関しては、厚生労働省が 2007 年 3 月にだした基準によって評定した。

【結果】

1. 連絡帳には「実行状況」の記述が多い

1) 参加や活動の実行状況をそのまま記述するもの

冬休み、ボール投げやサッカーを楽しくして過ごしました。 小1 男子母記述

p8803 共同遊び. 0

給食当番をしました。お箸を配る役でした。最初は二人でしましたので、私がやめてからもしばらくは調子よく出来ていましたが、途中で一本しか置かなかったり、やめてしまったりしました。

小2 女子担任記述

p 632（調理の手伝い；配膳）. 3

2) 参加や活動の「実行状況」から「能力」を推定するもの

珍しく、朝知らないうちに起きて、勝手に冷蔵庫にあったのを使って朝食を作って食べていました。なんとマヨネーズで卵を炒めてチャーハンを作って。包丁は一人で使えないので使わなくていい卵を使うあたり、感心しました。キッチン後は片付けをせず、こぼれたご飯で汚くなっていました。でも、少し前には、トーストを焼くのも難しかったのに、こんなことが出来るようになったなんてちょっと感動しました。

中2 女子母記述

a6300(簡単な食事の調理). 0 1←2 注：←は過去からの向上

a6401(台所の掃除と台所用具の洗浄). 3

3) 参加や活動の「実行状況」を他の要素との関連で分析・説明するもの

① 分析的な記述：参加や活動の「実行状況」を「環境因子」との関連で分析するもの

今日の文化祭の予行練習、体育館の中でも舞台の上でも耳ふさぎでした。 <u>マイクを入れる音やブザーの音が気になるよ</u> うです。
小6 男子担任記述
p9202 (芸術と文化) . 4
e250 (音) . -3

② 内容説明的な記述：「環境因子」を使って、状況を詳しく説明するもの

今日は、 <u>マンシヨンの玄関</u> に入ってからエレベーターまで <u>白杖</u> を使って一人でやらせました。「 <u>白杖がぶつか</u> るまで」 と <u>言</u> ったら、上手にできました。
小4 男子母記述
a4600 (自宅内の移動) . 2
e1201 (個人的な屋内外の移動と交通のための支援的生産品と福祉用具) . +4
e310 (家族) . +2

2. 「主観」の記述も多い

1) 本人の「主観」を推測するもの、代弁するもの

初めての交流給食に行きました。が、 <u>自分が給食を食べる場所ではない</u> と思って大暴れしました。結局あきらめて1組 で食べました。お腹が減っている上に長い間待たされるのが、 <u>ワケがわからず</u> 、 <u>何度か切</u> れました。小6 女子担任記述
--

2) 記述者の「主観」を記述するもの

給食のメニューは「 <u>キーマカレー</u> 」だったとのこと。ずいぶん専門的な言葉が出るようになったものだと楽しくなり ました。
小6 女子母記述

[考察]

本研究の分析から、連絡帳の記述文は、教師・保護者の書いたどの文章も、大部分がICFのコードに適応していることが明らかになった。（ただし、主観の記述に関しては、現在のICFには取り入れられていないが、ICIDHからICFへの改訂過程でも議論され、ICF付録に今後の重要な課題であると明記されていることから、分類の対象とした。）このことから、連絡帳の記述文は非常に有用な情報を豊富に示しており、連絡帳の記述を整理することは、児童生徒の生活機能を把握し、指導計画等に生かすことができるものになると考えられる。毎日のやりとりであるという意味においても、家庭と学校という生活の主な場である二つの場面での生活を把握できる点においても、連絡帳に貯蔵される情報は量・質ともに非常に貴重なものであるといえるだろう。

本研究ではICFのコードと第一評価点を使って記述文の分析を試みたが、記述文からICFのコードを引き出す作業は容易ではなかった。ICF

のコードに分類することは、日常的に行う作業としては実用的ではないと思われた。

一方、本研究では、連絡帳の多くの記述が「実行状況」を中心に、「能力」や「環境因子」「主観」で分析・説明するものであることが分析された。そこで、連絡帳の記述文を日常的に整理する指標として、「実行状況」と「能力」を主軸にした分類が有効ではないかと推察した。連絡帳の片頁に、実行状況・能力・その他のレベルを示した表をつけ、毎日の記述をこの表で整理する方法などが考えられる。（図1）

図 1

●月×日

担任

算数；買いものごっこをしました。今日は二人きりだったので、変化がなくいまひとつでした。模型のリングとバナナを買うのに、50 円と 100 円の比較をしました。穴が開いている開いていないを確かめました。乗らなく、「はとぽっぽ」を歌ったりして集中しませんでした。

体育；公園に行って、滑り台やブランコをしました。外のほうが気持ちよくて好きだったのかな。

音楽；「歌えバンバン」、「小熊の 2 月」リコーダー。集中してしたそうです。

●月×日

母

算数のお金の区別、おじいちゃんとやってみました。穴の有無も、ツルツルかどうかもわかっていないようでした。おじいちゃんここれからはふざけないで勉強すると約束したので、今度身が入らなかつたら言ってみてください。

今日は音楽のレッスンもありました。T は直前にトイレに行ったのに、途中で「疲れた～」が効かないと「トイレ！」の手をおうとしました。行ったばかりなのをご存知の先生が「終わってからね」と少し厳しく接すると何とか最後までやっていました。

	実行状況	能力	環境因子	主観	心身機能	身体構造	個人因子
内 容	買い物(金)	触覚 (硬貨)	一対一 祖父約束		集中力		
点	4	4	-3+?	...	4		
内 容	公園			外が好き			
点	0			...			
内 容	リコーダー				集中力		
点	0			...	0		
内 容	音楽レッスン		音楽教師		集中力		
点	3		+4	...	3		
内 容							
点				...			
内 容							
点				...			

毎日の連絡帳をこのように整理していくことで、現状を「実行状況」中心に分類して評価することができ、環境因子・主観などさまざまな要素との関連も記録することができる。しかし、記入にあたっては「実行状況」と「能力」の概念等 I C F の概念理解がある程度できていること、I C F の項目がある程度記憶されていることが条件となるだろう。

[参考文献]

(独) 国立特別支援教育総合研究所 (2007) 『ICF 及び ICF-CY の活用』, ジアース教育新社.

厚生労働省大臣官房統計情報部 (2007) 『生活機能分類の活用に向けて(案)』

障害者福祉研究会 (2002) 『ICF 国際生活機能分類』, 中央法規.

教育用 I C F データベース e-ANGEL の試作と評価

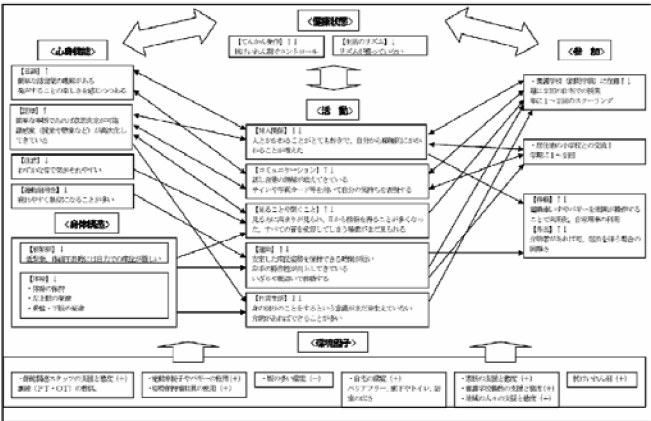
渡邊正裕・富山比呂志・下尾直子・齊藤博之・徳永亜希雄

(独) 国立特殊教育総合研究所・茨城県立下妻養護学校・日本女子大学大学院・山形県立新庄養護学校

KEY WORDS: ICF, 支援ツール, データベース

(はじめに)

ICF (国際生活機能分類) は多職種間の共通言語であることから、これを利用することによって障害のある子どもの生活を取り巻く、家族、担任教師、PT (理学療法士)、ST (言語聴覚士)、OT (作業療法士)、各科の医師、看護師、福祉機器工場のスタッフ…といった多職種にわたる人たちが、同じ言語で情報を共有でき、連携が円滑になる。また、障害のある子どもたちの支援を円滑に進めるために、「ICF チェックリスト」によって生活状況をチェックし、「ICF 関連図」(図1)を活用すると効果的であることが報告されている¹⁾。



(図1) ICF関連図



(図2) e-ANGEL (チェックリスト部分)

(目的, 方法)

e-ANGELの試作版を作成し、現場で実際に使ってもらい、評価を実施し、ポスターで報告を行う。e-ANGELをタブレットPC上に構築したものを5台用意し、盲、聾、養護学校、特殊学級、普通学級の担任の先生に使用してもらい、次項で述

(図3) 電子的に行う支援会議の様子

べる「FCS」との比較を行う。その際次のような観点に着目することが考えられる。

- ①チェックにかかる時間の平均
- ②子どもについて課題となる点が整理しやすいかどうか

(FCSについて)

「チェックリスト」を冊子媒体のまま評価に用いるのは取り扱い内容が膨大で複雑である。そういった使いにくさを改善するため、「付箋カードを使う仕組み」FCS (Fusen Card System)^{6,7)} が開発、提案されている (図4)。FCS はICF-CYに関するWHOのワーキンググループが、第一回フィールドトライアルで使用した資料を参考に作成されている。この方法のメリットは、「ICFの全項目をチェックできる」「カードを動かしながら複数で話し合いができる」などがあげられる。一方、「カードの記入・話し合いに時間がかかりすぎる」「関係を示す線が複雑で、巨大な関連図になってしまう」といった課題も抱えている。



(図4) FCS:付箋カードを使った面談の様子

(謝辞) 本研究は部分的に文部科学省科学研究費 若手研究 (B)14780130, 若手研究 (B)17700630の補助を受けた。また、ICF-CY Japan Network のメンバーから多くの助言を受けた。記して謝意を表する。

(文献)

- 1) 徳永亜希雄 (2004) 多職種間連携のツールとしての ICF (国際生活機能分類) 実用化の試み: 「個別的教育支援計画」への適用を視野に入れて、国立特殊教育総合研究所研究紀要第31巻。
- 2) 渡邊正裕 (2005) 電子化による ICF の可能性、ICF 活用の試み、(独) 国立特殊教育総合研究所、世界保健機関 (編)、第3章第12節、ジアース教育新社、pp. 167-172。
- 3) 渡邊正裕・下尾直子・齊藤博之 (2005) 電子化による ICF (国際生活機能分類) 活用の可能性-ICF チェックリスト試作データベースによる多職種間の情報共有、日本特殊教育学会第43回大会発表論文集、p173。
- 4) 渡邊正裕、富山比呂志、齊藤博之、下尾直子、徳永亜希雄 (2005) 教育用 ICF データベース e-ANGEL の設計と試作-ICF 関連図の自動生成に向けて、電子情報通信学会技術報告 ET2005-53、pp. 7-12。
- 5) 渡邊正裕、大杉成喜 (2006) 障害者児用日本語版高度シンボルコミュニケーション・デバイスと教育用 ICF データベースの開発、日韓特殊教育セミナー2006、pp. 3-28。
- 6) 下尾直子 (2006) 個別的教育計画 策定における保護者の参画を促すツールの提案-I C F-C Y を使い、K J 法を参考にした付箋カード、横浜国立大学大学院修士論文。
- 7) 下尾直子、関戸英紀 (2006) 「個別的教育支援計画」策定に保護者の参画を促すツールの開発~ICF-CY に基づき、KJ法を参考にした付箋カード~, 日本特殊教育学会第44回大会論文集。

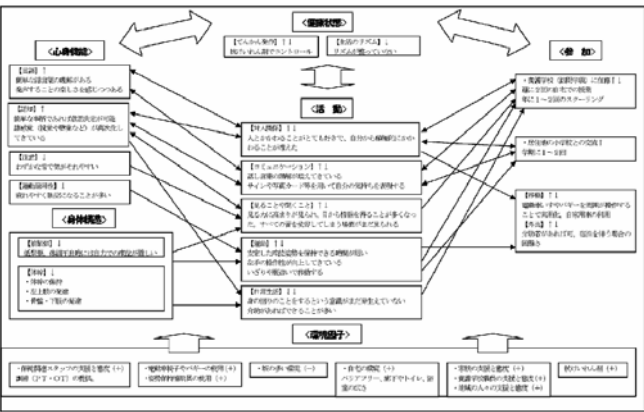
(WATANABE Masahiro, TOMIYAMA Hiroshi, SHIMOO Naoko, SAITO Hiroyuki, TOKUNAGA Akio)

教育用 ICF データベース e-ANGEL の試作 と今後の開発方針

○渡邊正裕, 富山比呂志, 齊藤博之, 大久保直子, 下尾直子, 徳永亜希雄
(（独）国立特殊教育総合研究所) (茨城県立下妻養護学校) (山形県立新庄養護学校) (筑波大学付属久里浜養護学校) (日本女子大学大学院) (（独）国立特殊教育総合研究所)

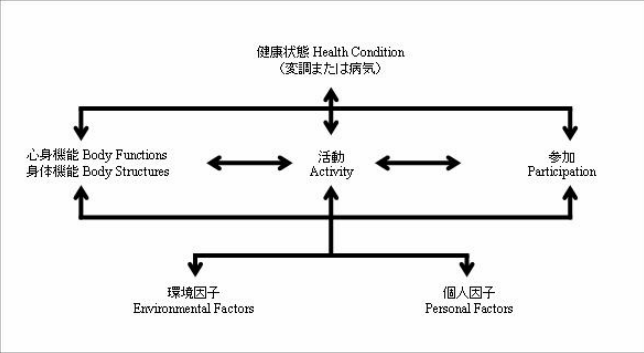
1) 目的

ICF（国際生活機能分類）は多職種間の共通言語であることから、これを利用することによって障害のある子どもの生活を取り巻く、家族、担任教師、PT（理学療法士）、ST（言語聴覚士）、OT（作業療法士）、各科の医師、看護師、福祉機器工場のスタッフ…といった多職種にわたる人たちが、同じ言語で情報を共有でき、連携が円滑になる。また、障害のある子どもたちの支援を円滑に進めるために、「ICF チェックリスト」によって生活状況をチェックし、「ICF 関連図」(図1)を活用すると効果的であることが報告されている[1]。



(図1) ICF 関連図

この ICF 関連図は、「ICF の構成要素間の相互作用モデル」(図2)に「活動(Activity)」「参加(Participation)」を中心に、具体的な情報を記入していったものである。



(図2) ICF の構成要素間の相互作用モデル

従来、ICF 関連図は、チェックリストによる診断結果をもとに、学級担任がボックスと矢印を用いてワープロソフト等で作成してきた。しかし、一定の熟練が要求されるなど、誰にでもできる作業ではなかった。また、ICF についてよく理解した教員であったとしても、チェックリストをそのまま評価に用いるのは取り扱う内容が膨大で複雑であり、使いやすなものではなかった。

このような使いにくさを改善するため、「付箋カードを使う仕組み」FCS(Fusen Card System)が開発、提案されている[2]。FCS は ICF-CY (ICF version for children and youth) に関する WHO のワーキンググループが、第一回フィールド

トライアルで使用した資料を参考に作成されている。この方法の最大のメリットは、「カードを動かしながら複数で話し合いができる」ということである。この方法を用いた 35 組の保護者と担任による実証実験では平均面談時間が 4 時間 58 分にも及び、最大の問題点となっている[2]。実施後のアンケートでは担任の 65.2%、保護者の 85.7%が「時間はかかったが仕方がない」と回答しているものの、現実的には面談の時間を削減する必要がある、現在できるだけ少ないチェックですませるための工夫を検討しているところである。



(図3) FCS による面談

2) 対象

今後、個別的教育支援計画が導入されると、発達障害等の障害のある子どもが在籍する通常学級の担任等にも個別的教育支援計画の作成が求められるようになると思われる。これらの教育支援計画作成を支援するツールの開発は急務であるといえる。この作業を電子的に支援することを目的に、我々の研究グループでは、教員向け支援システムの開発を行っている。

3) 開発内容

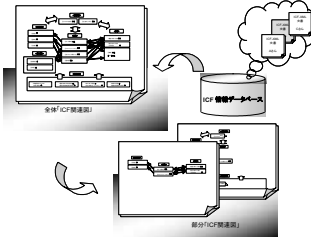
筆者らは平成 17 年度から、ICF に関する情報を電子化してデータベースに格納し、子どもの生活を取り巻く人たちが共有するための教育用 ICF データベース e-ANGEL[3]の開発を進めてきた(図4-7)。



(図4) タブレット PC による入力



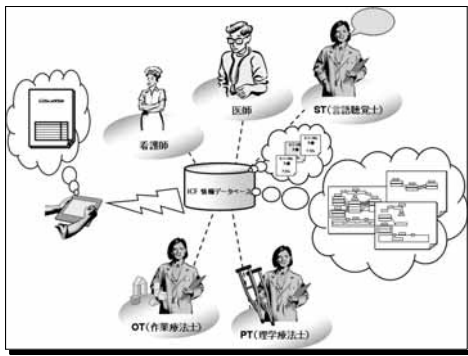
(図5) プロジェクターを利用した支援会議



(図6) 柔軟なデータ加工、閲覧

e-ANGEL (e-Automatic NaviGation for individualized Educational support pLan)

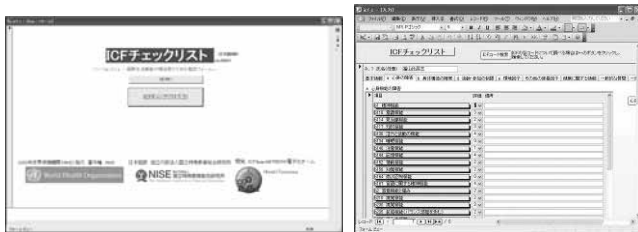
- チェックリストによるチェック機能
 - ICF のチェックリスト全体について頭に入っていないでも、システムの指示に従ってチェックを進めていくことができる。
- チェックリストの項目に対する全文検索機能
 - チェックリストの各項目に対して全文検索を行うことができる。
- ×カードの記入・話し合いに時間がかかりすぎる
- ×機材の扱いや、インストール作業が不安
- ×情報漏洩の心配



(図7) 子どもを支援する多職種による情報共有

e-ANGELは、次に述べる機能を備えている。

●チェックリストによるチェック機能



(図8) チェックリストタイトル画面

(図9) チェックリスト入力画面

タブレットパソコン等を用いて ICF のチェックリストの各項目についてチェックを行うことができる機能(図9,10)である。必要に応じて、各項目についての説明文を参照できる。ICF のチェックリスト全体について頭に入っていないくても、システムの指示に従ってチェックを進めていくことができる。また、チェックの実施者がチェックリスト全体を十分に把握している場合は、必要な項目だけを選択してチェックすることも可能である。

【電子化されていない場合】

旧来の方法では、ICF のチェックリストを片手に、専門知識を持っているものがチェックを行う。チェックの実施者が ICF チェックリスト全体についての専門知識を持っている必要がある。

FCS では、カードの順を追ってチェックを進めていくことができるが、多数の小さいカードを扱う点で多少の困難を伴う。また、一度行ったチェックの修正は、電子版ほど容易ではない。

●チェックリストの項目に対する全文検索機能



(図10) チェックリスト全文検索画面

チェックリストの各項目に対して全文検索を行うことができる機能(図10)である。たとえば、「目」を含むチェックリストの項目を検索すると、次のような結果が得られる。

b215 目に付属する構造の機能

b220 目とそれに付属する構造に関連した感覚

s2 目・耳および関連部位の構造

s230 目の周囲の構造

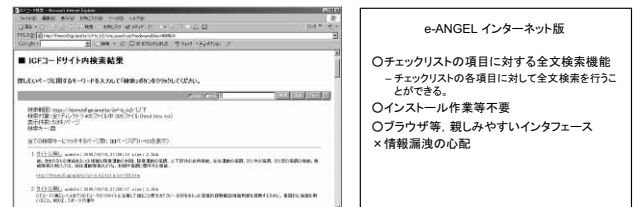
続いて、これらの検索結果からチェックリストの項目へのリンクをたどって、「目」を含む項目だけをチェックしていくことも可能である。

【電子化されていない場合】

「目」を含む項目だけをチェックしようとする場合、チェックの実施者が ICF チェックリスト全体の中で、「目」を含む項目がどこにあるのかという知識を持っている必要がある。

4) 入手可能性

e-ANGEL は現在、FileMakerPro 版のものと、MS-Access 版のものを試作している。これらをパッケージ化して配布することを検討すると同時に、インターネット経由で利用可能なサービスとして全文検索の CGI を利用した版も検討している。



(図11) CGI を利用した全文検索機能

5) 関連研究

ICF の電子化としては、次のようなものがある。

【WHO ICF Classification Hypertext version】[4]

→本家 WHO が公開している、ICF の電子版で、リンクを順にたどっていくことで、大分類から中分類、小分類と参照することができる。また、各項目や、説明文に対して全文検索を行うことができるようになってきている。

【ICF イラストライブラリー】[6]

→WHO ICF Classification Hypertext version と同様、リンクを順にたどっていくことで大分類から中分類、小分類と参照することができる。また、主要項目の内容をイラストで示すことにより、ICF の構造や各項目の内容を理解しやすいものになっている。

【ICF の職業領域への適用の検索】[6]

→春名由一郎氏による ICF および、ICF の職業領域への拡張への全文検索データベースで、ICF を職業場面で使う時に適切なコードを探すことができる。

6) 今後について

次のような要望、課題がある。

- 全文検索機能において「食べること」でも「摂食機能」でも検索可能でないと困る。
- 上記関連研究のイラストライブラリーのようなものが教員や保護者にとって分かりやすいようなので検討して欲しい。
- インストール作業が複雑なものや、有料のものは避けて欲しい。

我々が目指すのは、教員支援ツールの開発であり、そのことを踏まえ、多くの人に使っていただけるものにしたいと考えている。

- [1] 徳永亜希雄, “多職種間連携のツールとしての ICF (国際生活機能分類) 実用化の試み: 「個別的教育支援計画」への適用を視野に入れて”, 国立特殊教育総合研究所研究紀要第 31 巻, pp.15-51, Mar. 2004.
- [2] 下尾直子, 関戸英紀, “「個別的教育支援計画」策定に保護者の参画を促すツールの開発”, 日本特殊教育学会第 44 会大会発表論文集, p522, Sept.2006.
- [3] 渡邊正裕, 富山比呂志, 齋藤博之, 下尾直子, 徳永亜希雄, “教育用 ICF データベース e-ANGEL の設計と試作-ICF 関連図の自動生成に向けて-”, 信学技報 ET2005-53, Nov. 2005. pp.7-12.
- [4] WHO, “ ICF Classification Hypertext version, ” <http://www3.who.int/icf/onlinebrowser/icf.cfm>
- [5] “ ICF イラストライブラリー, ” http://wwwsoc.nii.ac.jp/jpta/05-data/icf_jpn/
- [6] 春名由一郎, “ ICF の職業領域への適用の検索, ” http://plaza.umin.ac.jp/~haruna/icf_jpn/index.htm

教育用 ICF データベース e-ANGEL の ICF-CY への対応

とインターネットでの公開について

渡邊正裕^{*1} 富山比呂志^{*2} 齊藤博之^{*3} 大久保直子^{*4} 下尾直子^{*5} 徳永重希雄^{*6}

<概要>。
<キーワード>特別支援教育, ICF, ICF-CY, 支援ツール, データベース, 個別的教育支援計画

1. 本研究の背景と目的

1.1 ICF について

ICF（国際生活機能分類）¹⁾ は人間の生活機能と障害の分類法として, 2001 年に世界保健機関（WHO）総会で採択された。多職種間の共通言語であることから, ICF を利用することによって障害のある子どもの生活を取り巻く, 家族, 担任教師, PT（理学療法士）,ST（言語聴覚士）,OT（作業療法士）,各科の医師, 看護師, 福祉機器工房のスタッフ…といった多職種にわたる人たちが, 同じ言語で情報を共有でき, 連携が円滑になる。また, 障害のある子どもたちの支援を円滑に進めるために, 「ICF チェックリスト」(図 1) によって生活状況をチェックし, 「ICF 関連図」(図 2) を活用すると効果的であることが報告されている²⁾。

第1部 a：心身機能の障害

心身機能とは、身体系の生理的機能（心理的機能を含む）のことです。

機能障害とは、著しい変異や喪失などといった心身機能上の問題のことです。

第1次評価点

0 機能障害なし

機能障害が存在しない状態。

1 軽度の機能障害

心身機能による25%未満の問題。すなわち、過去30日以内にほとんど困難さを感じなかった程度で、本人が我慢できる程度の問題。

2 中等度の機能障害

心身機能による50%未満の問題。すなわち、過去30日以内に時々起こっていた程度の問題で日常生活に支障を来している程度の問題。

3 重度の機能障害

心身機能による50%以上の問題。すなわち、過去30日以内にしばしば起こっていた程度で、日常生活の中で支障を来する部分が多くなる程度の問題。

4 完全な機能障害

心身機能による95%以上の問題。すなわち、過去30日間で毎日起こっており、日常生活の多くの部分に支障を来している程度の問題。

8 詳細不明

機能障害があるのは確かだが、問題の程度を特定する情報が不十分な状態。

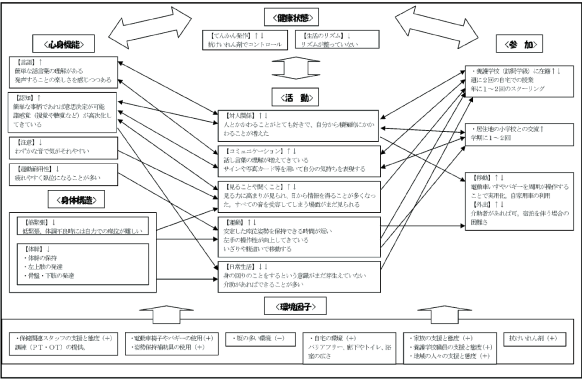
9 非該当

特定のコードを適用することが不適切と判断される状態。

(例：b650 女性の月経機能の評価は初潮前及び閉経後の女性には非該当となる)

項	目	評 価
b 1. 精神機能		
b110	意識機能	
b114	見当識機能（時間、場所、人）	
b117	知的機能（知的発達遅滞、痴呆を含む）	
b130	活力と気力の機能	
b134	睡眠機能	
b140	注意機能	
b144	記憶機能	
b152	情動機能	
b156	知覚機能	
b161	思考・認知機能	

（図 1：ICF チェックリスト（抜粋））



（図 2：ICF 関連図）

1.2 ICF-CY について

ICF は, 成長による変化の激しい児童期や発達初期の段階の人々について十分なカバーがなされていないかった。WHO の ICF ワーキンググループは, ICF に下位項目を追加する形で ICF-CY (ICF version for children and youth)を作成している。ICF－CY の適用により, ICF の教育分野での活用はいっそう活発化するものと予想される。

1.3. 個別的教育支援計画について

「個別的教育支援計画」とは, 障害のある児童生徒の一人一人のニーズを正確に把握し, 教育の視点から, 適切に対応していくという考えの下, 長期的な視点で乳幼児期から学校卒業までを通じて一貫して的確な支援を行うことを目的として策定されるもので, 教育のみならず, 福祉, 医療, 労働等の様々な側面からの取組を含め関係機関, 関係部局の密接な連携協力を確保することが不可欠であり, 教育的支援を行うに当たり同計画を活用することが意図されている。

*1 WATANABE Masahiro：国立特別支援教育総合研究所
*2 TOMIYAMA Hiroshi：茨城県立つくば養護学校
*3 SAITO Hiroyuki：山形県立上山高等養護学校
*4 OKUBO Naoko：筑波大学附属久里浜特別支援学校
*5 SHIMOO Naoko：日本女子大学大学院
*6 TOKUNAGA Akio：国立特別支援教育総合研究所

「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」が平成 15 年 3 月に出され、障害のある子どもたち一人一人のニーズに応じて、乳幼児期から学校卒業後までの一貫した支援を行うために「個別の教育支援計画」を策定することが提言された。また、新障害者基本計画に基づき定められた重点施策実施 5 か年計画（平成 14 年 12 月）では、「盲・聾・養護学校において個別の支援計画を平成 17 年度までに策定する」ことが示された。「個別の支援計画」を学校等の教育機関が中心となって策定する場合に、これを「個別の教育支援計画」と呼ぶ。

2. ICF-CY 電子ツール開発プロジェクト：e-ANGEL

平成 17 年に出版された「ICF（国際生活機能分類）活用の試みー障害のある子どもの支援を中心にー」³⁾の編集作業をきっかけに有志が集まり、ICF の電子的利用の研究として、子どもの生活を取り巻く人たちが共有するための教育用 ICF データベース e-ANGEL (e-Automatic NaviGation for individualized Educational support pLan)^{4) 5) 6)}の開発が進められてきた。

(1) 電子ツールが備えるべき機能

障害のある子どもたちの支援を円滑に進めるために、ICF の導入が効果的であることは、1.1 節でも述べたところである。筆者らは、ICF を特別支援教育で利用する際に、電子ツールが果たす役割、ひいては備えるべき機能について各方面から検討を行った⁹⁾。

(2) ICF を特別支援教育で利用するために解決しなければならない課題

ICF を特別支援教育で利用するためには解決しなければならない多くの課題がある。よく耳にする課題を次に挙げる。

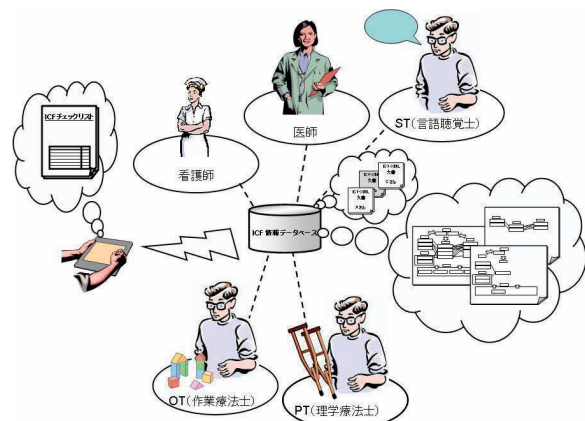
- ・全項目をチェックするには、時間がかかりすぎる。
- ・部分的にチェックする場合でも、1400 項目以上ある ICF の項目のどこに何があるのかとても覚えきれないので、必要な項目を探すのに手間がかかる。
- ・教育現場ではなじみのない用語が多く、とても難解である。
- ・ICF 関連図をどのように作成して良いか分からない。

これらの課題の中には、電子的なツールを利用することで効果的に解決できるものもある。筆者らは、ICF を教育、特に特別支援教育に活かすために役立てるための電子的なツールを開発してきた。

(3) 電子ツールによってあらたに可能になったこと

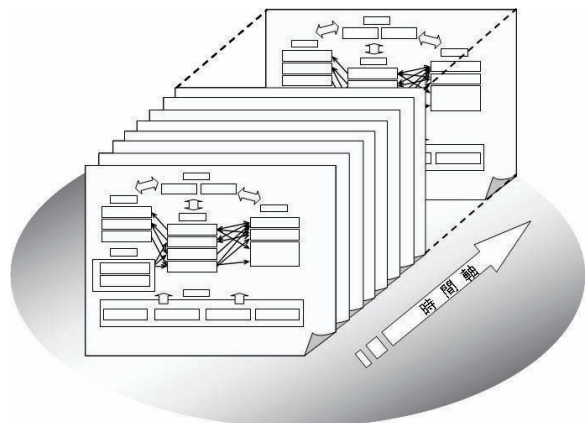
電子的なツールを利用することによって、まったく新しく利用可能になる機能もある。

- ・ネットワーク技術を利用することで、多職種間での有効な情報共有が容易になる（図 3）。



（図 3：子どもを支援する多職種による情報共有）

- ・時間の経過を追った比較が容易になる（図 4）。



（図 4：ICF 関連図の時間の経過による比較）

- ・ケースの記録等のデータの変更が容易である。

- ・課題や場面ごとの ICF 関連図を作成するのが容易になる。

これらは、これまでのような冊子媒体のやり方にはない、まったく新しい利点である。(2)の課題を解決し、(3)の利点を活用するために、電子ツール e-ANGEL の設計・開発を行った。検討した結果、e-ANGEL に持たせる

機能として、次に挙げる4つを目指すこととした。電子化されていない場合と、電子化されている場合の比較とともに説明する。

ア) ICF の項目によるチェック機能

[電子化されていない場合]

- ・冊子体の ICF 項目を片手に、専門知識を持っているものがチェックを行う。
- ・ICF の項目全体についての専門知識を持っている必要がある。
- ・一度行ったチェックの修正は、電子版ほど容易ではない。

[電子化されている場合]

- ・ICF の項目全体について覚えていなくても、システムの指示に従ってチェックを進めていくことができる。
- ・チェックの実施者が ICF の項目の全体について把握している場合は、必要な項目だけを選択してチェックすることも可能。

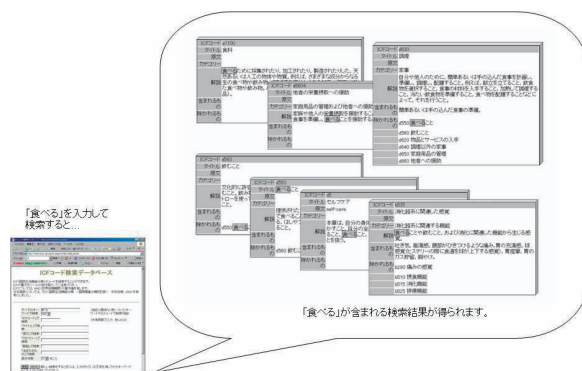
イ) ICF の項目検索機能

[電子化されていない場合]

- ・「食べる」を含む項目だけをチェックしようとする、チェックの実施者が ICF 項目全体の中で「食べる」を含む項目がどこにあるのかという知識を持っている必要がある。

[電子化されている場合]

- ・たとえば、「食べる」を入力して検索すると、「食べる」が含まれる検索結果が得られる。続いてこれらの検索結果から実際の項目へのリンクをたどって「食べる」を含む項目だけをチェックすることも可能。(図 5)



(図 5: 文字列「食べる」を含む ICF 項目検索の結果)

ウ) 関連図作図機能

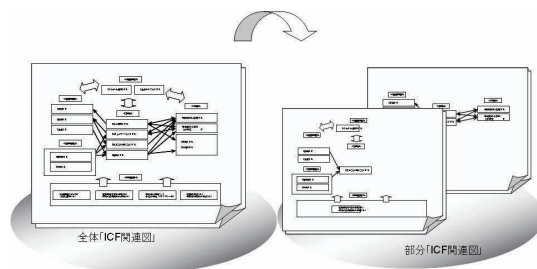
担任教諭と保護者の話し合いの際に ICF 関連図を用いると効果的である。ICF 関連図は話し合いの事前作成しておくこともあれば、話し合いの中で作成していくこともある。

[電子化されていない場合]

- ・ICF について専門知識を持っているものが、ICF チェックリストにもとづいたチェックの結果から、Word、PowerPoint、一太郎等のソフトウェアを使って ICF 関連図を作図する。

[電子化されている場合]

- ・ICF 関連図を話し合いの中で作成していく場合には、電子化されていると、適宜図に修正を加えることが容易になる。
- ・目的や場面ごとに複数の「部分図」を作成することも容易である。1,400 余りの ICF すべての項目の情報を反映した関連図が「全体図」であるが、実際に描くと非常に巨大なものになる。それに対して「部分図」は全項目の内、目的や場面に関連する図を作成するために必要な項目の情報だけを使って描かれた ICF 関連図を指す。



(図 6: 「全体図」と「部分図」)

エ) データ管理共有機能

[電子化されていない場合]

- ・チェックされた結果は Excel 等で電子的に管理されることもあるが、共通のフォーマットで扱われず、データが関係者・機関間で共有されることは難しくなる。

【電子化されている場合】

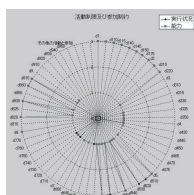
- ・データベースのもつ「アクセス管理」等の機能が利用可能になる。「アクセス管理」は、データ毎、利用者毎に閲覧できるデータと閲覧できないデータを設定することができる機能のこと。例えば、「検査結果」のデータについてはAさんに関わる支援者や保護者の全員が閲覧できるようにしつつ、「学業成績」のデータについては学級担任と保護者以外は閲覧不可能にする等、きめの細かな設定ができる。「アクセス管理」の他に、「同時実行制御」「障害回復」など、データベースには強力な機能がある。
- ・多職種が連携・協働して子どもの教育支援を実現していくためには電子化による情報共有は必須であると考えられる。

3. これまでに開発されたツールについて
ICF や ICF-CY そのものやその活用、そして子どもたち、家族のこと等を考える仲間達のネットワーク ICF-CY Japan Network では、Web サイト⁷⁾を開設して情報発信を行っている。この Web サイトには、電子化プロジェクト e-ANGELS のページがあり、開発中の電子ツールを順次公開し、利用者に使ってもらうことで改良を重ねている。

（１）「ICF チェックリスト e-ANGELS Edition（試作版）」

MS-Excel で作成した、ICF チェックリストの電子版。WHO から出された「ICF チェックリスト バージョン 2.1a 臨床用フォーム」の日本語訳版⁸⁾を、ICF-CY Japan Network の電子化チーム e-ANGELS が、独自の工夫を加えて開発した。図 7 のリストでチェックを行っていくと、図 8 のようなレーダーチャートができあがり、特別支援教育の柱の 1 つである個別の教育支援計画に活用することを想定している。

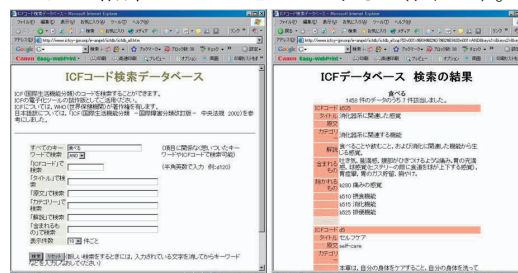
（図 7：チェックリスト）



（図 8：レーダーチャート）

（２）ICF コード検索データベース（試作版）

CGI で作成した ICF コード検索システム。キーワードを打ち込むと、すべての ICF コードから、関連するコードを検索することができる。例えば、「食べる」と入力(図 9)して[検索]ボタンを押すと、「タイトル」「原文」「カテゴリー」「解説」等に「食べる」が含まれるコードが結果として返ってくる(図 10)。



（図 9：ICF コード検索データベース） （図 10：検索結果）

<参考文献>

- 1) WHO ICF CHECKLIST Version 2.1a Clinician Form, <http://www3.who.int/icf/checklist/icf-checklist.pdf>, 2003.
- 2) 徳永亜希雄, 多職種間連携のツールとしての ICF (国際生活機能分類) 実用化の試み: 「個別の教育支援計画」への適用を視野に入れて, 国立特殊教育総合研究所研究紀要第 31 巻 (2004)
- 3) 独立行政法人国立特殊教育総合研究所・世界保健機関 (WHO) 編著, ICF 活用の試み, ジアース教育新社 (2005)
- 4) 渡邊正裕・下尾直子・齊藤博之, 電子化による ICF (国際生活機能分類) 活用の可能性ー ICF チェックリスト試作データベースによる多職種間の情報共有ー, 日本特殊教育学会第 43 会大会発表論文集, p173. (2005)
- 5) 渡邊正裕・富山比呂志・齊藤博之・下尾直子・徳永亜希雄, 教育用 ICF データベース e-ANGEL の設計と試作ー ICF 関連図の自動生成に向けてー, 信学技報 ET2005-53, pp.7-12. (2005)
- 6) 渡邊正裕・富山比呂志・齊藤博之・大久保直子・下尾直子・徳永亜希雄: 教育用 ICF データベース e-ANGEL の試作と今後の開発方針, ATAC カンファレンス 2006 京都テキスト, (2006)
- 7) ICF-CY Japan Network ホームページ, <http://www.icfcy-jpn.org/wp/>
- 8) WHO 著・独立行政法人国立特殊教育総合研究所訳, ICF チェックリスト バージョン 2.1a 臨床用フォーム, 文献①, 17-31